40
127

古今和歌集序解

岡吉胤著

085946-000-8

40-127

古今和歌集序解

岡　吉胤／著

M26

DBD-0557

古今典故集成

[illegible]

40-127

No. 385/477
乃乘金色人

古今和歌集解の首に記す

紀乃貫之ぬしの此序のもしめに人の心を種ねとしてよろづのことのもとをそなれりけるといへれしはたゞやまと歌に かぎれず人のむのいとふことをかく上にもひろくとれることばなりうはまづ心に思ふことを口にいへるは言なりことは心の音をいへり其心音の萬の事物にふれて多かるは木草の葉のしげきが如くあるよりことバとはいへるなるべし心に思ふことをうのことばに出しうをまたもじにうつせバうたともふみともなれるなればことばとふみとは物なりてかげあるにひとしくたがひに相そなれぬものぞかし然るに輕嶋明宮の大御代に漢もじわたりそてよりひたぶるにうを學ぶことゝなりて常のことばと文とはことものゝごとくなれりけるはいとたよりあしきことのかぎりなるに今はた西から國の横もじをもて我皇國人にあはねく其文をかゝしめんとするものあるはいう

にぞや人のことばは其國々にことなれば文かくことも又同じからざるべきことにこそ然るに漢土は世のうつりかはりしあとまふりてことばもかはりて今は文と言語とことものゝ如くなりたるもせんすべなし西から國の文も常いふ言とをのみしたしからぬよしに

て彼國人の中にも皇國の假字文のうるわしことばをうつして人情まうとからぬをもて假字文を世界またぐひなきものと云へるあり然るま今は萬の國にてゝじはれる世なれば何れの國の文をもしらでかなはぬこと更にもいはねどうは專らまねびの人をさだえてしからん人の齡まかぎりありてつとむべきこと多ければ漢文、洋文をもなべての人まかゝしめんはたやはからぬわざにてよろつねの人乃なしうべき事ならねばわれは我國乃假字文をひろくしらしめ学ばくかゝしめんことこそあらまほしけれこそ〳〵我皇國は畏こけれと天皇の大御統とゝもに萬の事物神代も今もかはりなけれど瑞籬の久しき世々を經來りていさゝか古今のうつりかはりなき事能はずかれ上つ代乃ことばゝいと古くて便あしくさりとてむげに里びたる今の世のことばまよるべきまもあらねばみつ栗の中つ御代あるをこそよしとすべけれ其中比の文詞も貫之ぬしゝ我もじめとすべければ同じぬしのかゝれたるこの古今集序はゐ土佐日記、大堰川行幸和歌序おどをかゝ文の模範とすへれをしゝ先哲等もいひおかれしなればまづよくうをしりえて其後の物語ふミおどをも見るへきありさるまま土佐日記はさきまま畧解を著しれあり今もた此序をときさとしけるついでまに行幸和歌集をもいさゝかときさきまへつれば皇國の語をしり皇國の文をのゝんまはばづ此貫之ぬしの文よりもじむへきことまあろかくいへるは乃樂舍のあるじ岡吉胤あり

明治廿六年二月

古今集序解

岡吉胤撰

やまと歌い　やまとい鄕の名より發りて一國の名となりぬるを神武天皇の此國を開きて橿原宮を創建し給ひてより數代の天皇宮殿をせしより大和としいへばおのづから日本を總ていふ名となれるなり　たゞ心わおこれと思ふことを歌ひ出るよりいへり古へとたゞに打上ひ様あらで專らうたゑ作りもてゆき古書ともにみえたり

人のおこゝろをたねとしてよろづの言の葉とぞなれりける

人の心に思ふことより發りて出るにたとへたり言の葉といへるい種より生立たるにいへりこはとやくよりいへることゝおぼへて万葉集の名もよろづれことのことふことなればなり

此處はまづうさちふものゝ發り言の葉の本をゆへるなり然るにたゞ歌はと書べきことなるを大和歌はとかけるはあるまじきことな

るを己が奈良朝をもこなた專ら漢學の盛りおこりしより漢文、唐詩などいへるに對へて和歌、和語などいひなれて今はあやしとも思はぬ人の多かるいかゞや漢土は世々に主のかはれば前つ代の詩を唐詩宋詩などいへり其世にあて宋詩、清詩などはいはぬゆかしされば和なし天つ日嗣知しめす皇朝よりてはやまと歌といはん事理りにたがへるなり

よの中にある人ことわざしげきものなれば　世の中にありふる人の上にはいろ〳〵といふべきことの多くてかぎりなきをいへりことわざに諺の字を當たるは非なり諺は童謠、妖言などをいへるにてこゝわは協たずまた事業をいへるは一わたり通えたれども尚よぐもあらずこゝは直に言を心得てあるべきなり

心に思ふことを見るものきくものにつけていひいだせるなり　こゝろはたゞ一つにていと狹くて限あるやうなれども世の事業の多かるを見聞ものに應じていひ出ることのはのいと繁くいとひろくして限りなきものぞ

上に言の葉のもとをいひおこしてこゝには其よしをことゝされるに
て人の心の活用より千萬の言の葉となりて古今にわたりて歌の道
れ廣く尽せぬ
ことをいへり

花になくうぐひす水にすむかはづ乃ちよろを聞けば　咲き句へるはなの梢にきなく鶯水の中に住てある蛙などの聲をきけばみなゝれぐに面白きはろれやかてうたなり

いけるものいづれか歌をよまざりける　世にいきてあるものは鳥類、虫類にいたるまで皆それ〴〵わ歌をよまぬものはなきぞとなり

鳥、虫などを時候に感じて聲をたつるものなりそれやかてかれらのうたなれば人たるもの折にふれてあはれと思ふことをもだすべきにもあらねば必ず聲をあげてうたへることのなどうなかるべきされば貴き賤きの別なく誰しも心得あるべきことゝはげましいへるにていと面白きことがなり

ちからをいれずして天地をうごかし力は血脉より出たる言なればおもき岩なをちからをて動かせるにむかへて歌はさるてとおら神をゝいへりあめつちをうごかしは漢文の序に動二天地一感二鬼神一とあるによりてかゝれたる語なれど歌によりて天地造化の上に思ひはらられぬ去るじありしこと古ふも今にもなしとはいふべからす

ぬおよかみをもあはれとおもはせたゞなればおよかみはたゞ幽世の神たちとみてあるべきあり皇國の言ふ鬼神とつゞけたる事なくまたれにちふてとも上つ世にはなし漢にて神とは不可思議玄妙の神理をいひて皇國にいふとはあふてあはぬ處あり皇國にては天地造物の御靈を本にて人の靈をいひまた鳥獣草木にも靈あるものを神とす幹用と分つまでにはいたらねどかれは理上より云ひこれは本躰につきて云へるとの差別ありされば神ふよき神あしき神あるなり其あしき神と人の死たると漢土にては鬼と云へれど天地鬼神とつゞけたるはあしき神を云へるにもあらざればふゝはたゞ神と見てあるべきなりあはれとおもはせは上の動かしと同し意にて天地鬼神を感動せしむると云へるとをあやなしてつらねられたるはさるとなれど漢語に引れて鬼をれにとよされたるはくちをしあはれは深く切なるとあれどアゝハレと嘆息するとあるさるによりてよろこぶにもめづるにも悲しむにも云へり

をとことをこなあの中をもやはらげをとこは小津子の義にてもと若き男を云へるより男子の通稱となれるなり又をとこにむかへてをとめと云へるは小津女の義にて少女を云へるなりをみなは麻紡女の義にて女は紡績を業とするとり去か云へりとおん麻うミれウを省きてをみなと云へるしを音便にをんなとも云へるありさて男女の中をやはらぐるは歌の常にて擧云ふにいとまなけれど古へは人の心すなをにして互にまことをいひたとひ怨み恨ることあるにも眞心をもていへれば必ずなびみて波風もをさまり行ものなり後世にもたまゝおはさる例なきにしもちらねど動すれば歌もておくりこたへにあだくらべ言とがめなどして云ひあへるが多くはさみだりでとのすさめぐさとおれるはほいなきことぞかし

たけだけものゝふの心をなぐさむるい歌あり

ものゝふは物部より出たる言なれば軍事にあづかりて荒びたる男を云へるごとくきおやるは其頃のいひおらはしのまゝにやあらん古は文武の名をわかず君臣皆たゞきれもてとして御代を治

め給ひしなれば軍人のみに限らず君にも臣にも武を荒き人れ心を云へるなりさてろの心をなでめなぐさめたるとはた古今に其例多かり

此段い哥の功德を云へるにて古にも今にもよく詠得たらんには小野小町の「天にます神もみまさはたちさわぎあまのとがはのひぐちあけたなへ」と云へる歌にて忽ち雨をふらゑめまた伊勢大神宮へ勅使を立てられし時長雨ふりければト部兼直「八つ風あめの八重雲吹とちへはや明らけき日のみかげみん」是ふて雨はれ神前の奉幣めでたくさゝげ參らせ勅使歸參ありしとかやまた弘安年間蒙古の攻來りし時宇多上皇の「から國のよせくるあだなみよとく吹きかへせ伊勢の神風」とよみて風宮お捧げたまひしかば忽ち颶風起りて賊船と吹覆せりとなんかゝることゝもをや天地を動かしといふべきてとも鬼神をもあはれとおもはせとは小式部が病篤くて今は此世のかぎりとみえけるに母の和泉式部かたはらそひてひたひをおさへて泣けるに小式部目を僅ふ見あげて母の顔をつくづくとみて息のしたよりて「いかにせんいくべきかたもれも母えすれやにさきだつ道をしらねど」と申ければ天井の上よりあなあはれといひてけりろれより身の熱もさめたりとなん是等の類をいふなるべし男女の中をやはらげちふてそにつゝては非例いと多かりてゝに

古への事一つを擧れば雄畧天皇の御時三輪川の邊にて少女に御契言ありて後御忘れましゝを女は老果るまで守居て其よしを申奉しかば天皇いたくめであはれみ給ひて大御歌をたまひしなり彼老女いたく泣よろてびたりさてこそ死ぬとも御うちみのこちざらめたけきものゝふの心をなぐさむるとはこれも右に申せし天皇と勝れてたけくれはせしに哥によりて御心のやとちぎましゝ事多かりし古事記をみて知べし

此歌あめつちのひらけ始りしより出來よけり

あえい天日界を云へり訓義い明所見の義なる地球にわゐれる言なり訓義い聯く土の義といへりゑは大洋を隔てたる國にて國々も地底の連續たるものなればなりひらけ云々は開闢の初發を云へり其歌は伊邪奈岐伊邪奈美二大御神天津神たちの神勅によりて天浮橋よりれのでろ嶋に天降まして夫婦の道を始めたまふる時に男神まづ唱へたまへく「あなわやしえとめを」と女神のちに唱へたまへゝあなにやしえをとこを」是を哥の初めと云へるなり此時はまだ歌といへることばの定りもあるべきならねどあれとれもおしたまへる眞情のあらと

れて自ら哥をあれるを後世の贈答に鶯鶯がへしとれへるに適へるもいとたふとし

上には歌い人の心より出るものなるとし哉あげてゝにい其歌のはじまりしてどを云へりさくてゝにひらけとあるは日本紀に淮南子の文の開闢とあるによられりれを我皇國の古言に協はざるよしは己に先哲の説ありさて又天いはやくなりたれど地はてろ二神の生成し修理固め給ひしれば天地の始めとは云へるなり是等のことは徴古新論に委しくいへり

おかいあれどを世につさはるよとは

上をうけて諾冊二大御神の宣給ひしてともありつれどもたしかに歌と云ひて今の世にも傳いれるはひをかたの天よしては下照姫にはゝまり

ひさかたは久方、久堅など書て天の冠辞なり神代紀に天先成とありて地よりはやく成しによりて久方といへるにや下照姫は國津神なれども天に昇りて詠せる歌なるを云へりろい先に天津皇祖の命たち天稚彦に下つ國をむけ平らげよと勅して下し給へりしかるに稚彦下りて大國主命の御ひすめ下照姫のもとに住て復命申さゝりければ天より名なし雉を下して伺はせ給へり其雉をも射たりけるに其矢天よりかへりて稚彦の胸にあたりく身まかりぬ其かばねをれくりて下てる姫の天に昇りて有時其兄味耜高彦根神も行て吊ひ坐しに稚彦の親族等其神の稚彦に似たるをもて稚彦ならんと取すがりたるを憤りて其喪屋を切仆して飛去給ひしかば其神の名をも知人なかりしに下照姫其兄の名をあらはさんてよめるなり其哥「あめなるや、れとたあばたの、うながせる、だまのみすまるに、あなたまはや、みたにふたらす、あちしき、たゝひこねかみ、や」とあるこれなり

あらがねつちにしては須佐之男命よりぞおよりける

あらがねは荒金にて土中の鑛を云へり土中には必ず鑛氣を含有るものなれば土の冠辭となれるなりすさのをの命もと此國ゐて生坐つれど天に登りて己に天つ神ともならせ給ひしを又此國に下りて詠給ひ玄故に地にしてはといへり此命天にて無狀の事ありければ天つ神たちいかり給ひてやらひ給へりさて命は出雲國に下り坐て八俣大蛇を斬ていおだ姫を御妻とし須賀地に宮つくり給ふし時雲のたてるをみて詠せ給へる御歌「やくもたつ、いづもやへがき、つまごめに、やへがきつくる、そのやへがきを」とよみ給へる是三十一文字の歌のそしめなり

上よりあげたる二大御神の相唱へまゝ御言はおれどいまだ哥のかたちともなければそをおきて此下照姫、須佐之男命の御歌を世につたはれる歌のいとめとはいへるなり

ちはやふる神代よりの歌のもをだかまらを

ちはやふるは神の冠辞なり古事記に道速振荒振神などありてもとはおしき神にいへる言なれども一速振また伊豆速布留などもおりて神は御稜威の疾劇かるをいへると相通ひてとき神にも云へり神代と神武天皇の前をしかいひなれたり神代の歌はもとより神武天皇よりてなたにも推古天皇の御世の比までは三言、四言、五言、六言などの哥もありて其もにの數も定まらずしていと異なるも多かり其中に今傳はれる哥をみれば神代の歌は中々よ解がたからず神武天皇の御うたをはじめて其後の歌ゐこそ解得がたきが多かるめればこゝの神代はたゞ上つ代とみてあるべきなり

すゑはにして事のこゝろわかがさかりけらし

すなはは質朴をいへり人れ世となりては他人も聞とくべく心をけてよむべきを上古と人の心の淳粹、質朴なるより古のまゝある其世の言をて詠出たる古風の哥なれば後世よりみれば解分がたき事も言も多からんとおもはれ

人の世となりてすさのをの命

此みこゝは神代の神ゐ

よりぞこゝをもゞあまりひとをもゞはよみける

坐ることは誰しの人もまがふべき事あらぬよかくかゝれたるはいかゐといふにては其言を上下にいへる一つの文體にていとおもしろく此體古きものがたりまた此集のはし詞などにもみえたりては人の世となりてみる一もじの哥を詠ことゝなりしはすさのをの命より始まりたりといへる意なりまたみそもじ云々をみそぢあまり一もじとあらまほしくいへりし人もあれどこはもたとせあより六とせせとつかあまりみかなどぬへる例なり

此處は立かへりて神代の哥どもの事をあげて後の世にもはらよむ三十一言の歌のことをむ神としていひおこされたるなり文字さだうならずとはかの二大御神の御言下照姫のうたなどをいはれたれど其後の御代々々にも古事記、日本紀、萬葉集などとみるに長歌ゐて

ろ妙なる歌も多ろるにたゞ短哥をのみ歌のでとくいひなされたるは自ら心のよるろたにひかれたるにてかたれちとやいゐべき

かくてぞ上を受けて下をおこすことばなり花をめでめては愛また感をも訓りほめいでの略といへり今俗慶賀の詞にいふは芽出よりいひて吉兆をめでるといふ意ゐとれるならん鳥をうらやみ美のうらは心をいへるにて裏病の義なりと云へり かすみをあはれあはれびあはれふなども云ひて可怜をよみまた憐愛の意なり上おもいへり露をかなしむかなしむのかは感悴枯また殺斬などあり皆其身に切なるを云へる言なりまた金粛の義ゐて秋れ金氣の物を粛殺するにいへるとなん此集ちゞに物てそかなしあれ秋は悲しきなどいへるにて知べしまた可愛可憐の義にも云へりあはのつなでかなしもとあるは網手をひくさはの面白きをいへり心おとは多くそまさまよひ成にけるこゝは世の人の心に或は愛或は美み或い憐み或は悲むにつけてよめるうたの心も詞もひろく種々になりたるとなり

哥と其物、其事にふれて心に深く感することを詞に出してうたひ出たるものなるをかりに花、鳥、霞、露もて言にあやをおせるのみあれば

こゝに或人の古歌などを引たるい中そにかたくなゝり

とはれぬ所をもいでたつあきをもとよりはゝりて年月をわすりり遠きところにもくもとはたゞあしふみいだす足もとよりなりり始まりて幾月も何年もかゝるやうな所にゆきいたれりとさかき山をふもとの塵ひぢよりありてあまくもたまびくまでおひのぼれるおとくまよおの歌をかくのおとくなるべしいかに高き山なるももとはふもとの塵や泥土のつもりて遂には天雲のたなびくかゝるほどの高き山となれるやうに此歌もはじめはいうぐしからぬが後には世に名だゝる哥人ともなれるにたとへたり

こゝは哥よまん人の順序を云へるにて哥は誰しも入たちやすきものなれども其おくかにいたりてはたやすからぬさなれどたゞみなく物じたらんよはいかゐる遠き所にもいたり為べくいらなる高き山ともなりなんものゞとなりてこそ漢文ゐ千里始二一歩一高山成二微塵一と

あるによりてか
ふれたるなり

おほいづの歌はみかどのわたはむはざめなり

ては應神天皇の崩まし

けるに大さゝぎの命菟道稚郎子と御位を相ゆづり給ひて三年過し給ひしにわきいらつこの命かくれさせ給ひつれば遂に大さゝぎの命ぞ御位に即ませる事とありつるを冬籠りて春さく花にたとへて「難波津にさくやこの花冬ごもり今を盛りとさくやこの花」とよみしことをいへりなにはづは神武天皇の浪速國と宣給ひし御言より出て今の大坂のことなりみかどはもと大内の御門をいひまた朝廷をもみ後には天皇を申奉ることゝなりつるありれほむはじめとは仁德天皇の御代のはじめをいへるにて百濟の博士王仁がよゝて奉れりとなん淺香山の言の葉はうねめたちむれよりよみてこは昔葛城皇子災みちの國に遣ひし時其國の官人等を集めて宴をまうけ給ひしに國人等いとむくつけく無禮なりければ皇子憤怒に堪かね給ひしを前の采女の風流なるのありて杯をとり皇子の膝を打て拍子をとりあさか山かげさへゝゆる山の井のあさき心とわが思はぬにと詠じかば御心なごみ坐りしとぞ萬葉集に見えたり

おのふたうたい歌の父

母のやうにてぞ手ならふ人のはゝめにぞ

こゝろ二たつた前なるは男のうたにて天皇の御代の始めをことほぎ奉り次なるい女のうたにて皇子の御心をなぐさめて事平らかに成しなれを此二首を歌のちぶはゝのことくに世に尊みて唱へ來れりしを山城の京となりてのかた稚子の文字習ふ始めとして書てあたへて歌をも唱へおらはする例とせしおらん

上には歌の起原また歌の功能なを擧てて、には其効驗を擧たるおらんをさるべき言もなくてふと出たるがごとし故に縣居翁の後の人次の六の躰と前後に書損りるにやあらんといはれたり

そもく歌のさまむつあり

上のごとく歌の事はひろくも大きくも限りおきものなれど取すべていお時は六の躰につゞはれりといふ意あるべし抑はそれもく〜と前をうけていお起すことばなり

からのうさにもかくぞあるべけ

からうさい漢土の詩をいへり彼詩よも此六躰はあるべしとなり

ては詩に風、賦、比、興、雅、頌の六義あるをとりていさゝか言をかへ歌をもあげて此國に元より此六つの名も有しやうにのきしものなりされど六くさに分ちいふこと皇朝の古意にかなへりともおぼえずはた次々に其引出られたる歌どもものみなあたれりともれはえざるは遺憾ことなる上からうたのことをもいはれたるば贅言ならずや

其六くさのひとつそへうたへ奉れる歌

（おほさゝぎ）おほさゝぎ云々は下五くさの例にとづれてこゝにれみいふべきことにあらずては後人の加へたるならんとて縣居翁はとぶかれたりろへ歌とはうとべに他れ事を云ひて下に思ふ心をろへたるをいふ

あをはづにさくや木の花冬ごもり今を春べとさくやこの花

この歌表にはなゐゐづにさき匂へる木の花をもて云ひて裏にはかの新御代の天御さかえをろと奉れりこのはなゐもはら櫻をぬへり古注に梅の花なるべしといへるは冬でもりといふより つゞけて春きでさつ咲もれは梅なるより心せまくもしか定めたるものおれど梅は天武天皇の御代ごろにはじめてかち國よりわたりきたりしものなればなり

神武紀に諷歌をそへ奇たとよみさるによりてしかよめるが萬葉集に譬喩歌とあげたるも表い他し言にて裏と相聞の意なるいやへ歌ともぬふべきなれどたとへ哥とのみいべれば彼諷哥をもしか訓べきにや

ふたつよいとのぞへ歌

こは一つく物をかぞふるがごとくとめるものを云ふたゞ事うたはことばのあやをあさず有れまゝによめる「さく花にれをひつくこのゆぢれを云ふ此二つは似て異なり

あさ身にいたづきのいるをもしらぞて

「といへるあるべし春の花にいたく思ひつきてはちをしひに心をつくゝ野に山にたづ絲あるきて身に勞のしむをもれぼえぬはいとあじれなき事ぞとなりあぢきなきは俗にむやくなゐ埒もなきなど云ぬにあるきり

或說に此歌はつぐみをかくせる歌なりとあるによればいたつきは矢の身に入よしをいべりかくときても其意は通ゆれどもさてもか

ゑへ哥にもたゞこと哥にもあらざれば本註に從ふべしいへるなるべしいへる哥ろれおるべきの義なり

三つにはおすらへ歌なずらへは準をよめり並擬へる義なるべし是を畧してはなぞへとも訓りては詩經にいへる比賦お「君にけさあしたの霜のおきてゝまゞ戀りと或人いへり

おきてにきえやわたらむ」といへるおるべし君には一本に君がとお

るに從ふべしては此朝おに君がれきて別れいなば思ひ出しく戀しきた び毎に思ひきえてやあらなむゞ云ふを朝霜になぞへてれきとも消ともいへるなり

此哥に霜のれくと人の起をかぬるたゞひをなずらふと云ゞときは、やゝ後の言なりされば此歌古意にかおはざればこゝにもよく適へりとも

ぼえず

よつにはたとへうたたとへは萬葉集に譬喩哥とかきたり立敎の義にて物を一つ立てとはかゝる事ぞと

をしへしらするおり或人は興賦なりと云へり興とは物およりて思ひおこすこと有を云へり「わが戀はよむとも

つきじありそ海の濱のまさごはよこつくすとも」こは人をこふ

るふ思ひの數のかぎりなきにたとへては濱の眞砂の數も及ばじと云へるなりありろうみは荒磯海なり此歌ゞ萬葉四に「八百日行はまの眞砂も

そが戀に豈まさらめや沖津嶋守」とあるをかくとりかへしものなりとゞ

たとへ歌と云ふはいろ〳〵の草木や禽獸などにたとへてあらゝに云はずして其事を去らしむるなり然るに此ゞが戀はの哥はおく

れたる所もなく始めのろへ歌と云ふゞ同じければこれもよくすなへりとも

おぼえず

いつゝにはたゞおと歌こはぬふ事物にもよせず言もかざらずつねにのゞとくいふを直言うたといい

へ「いつはりのおき世おりせばいこのばこのり人の言の葉

うれおからまし」といへるおるべし世の人といつゝり多ければ思ふといへどもれ

ぽつかなきにいつはりといふ事のおき世にしてれも
ふといふことをきかばぬか計り嬉しかりなんとおり

かくいさゝかも言をろざりよせたる事なきをたゞこと歌といへる
にて詩にいいゆる賦の躰おるべし直言といへることと古くは物に見
えざれども萬葉其他に例歌は多かるべしてきも一つのさまとなり
ぬるからも詞によせかざることはおくとも其心のれもーろくたへ
ゆることのなかるべしやたゞ一ふしの見どころ
もなき平凡のうたをいへるにはあらざるおり

むつにはれはひうた

いはひはいみと同言にて凶を忌さけて吉を招くの義なれば神を祭るには汚穢を忌さけて祭場また其身を清潔ならしめ君を祝ぬには天地の長く久きをあげてみ去かく替らむこゝをいみ親を祝ふには鶴亀の久しきよはひをいひて露、霜のはかなき事をいみ其外忌庭、忌瓮などみないみといひと同じされば祝賀、慶賀、忌齋、忌ごとくさぐ　あれぞもみないはひともいみとも云ふべ「此とのはうべをとことけりさき草のこつゞよつきおり

ばゝ殿づくりせり」と云るおるべし

この御屋形をみれば誠に富榮えやせるさまの

あらはれて三阿、四阿に造り立て甍、榱、椽などかゝがおにしげくみえて
いかめしきを云へりうべは然なりと諾ふことばなりさき草ハ福草にて
よき祥瑞の草とず其形は莖一本に枝三つありといへり顕宗天皇の御時
御庭に生たりしを採て奉る故に三枝部の氏をたまひし事あり萬葉集に
さき草の中とつゞけしも三つ有ものゝ左右と中々あればなりてゝには
三つと云へる冠辞におけるなりみつばよつばハ三つま四つまなりはと
はとかよふはせばきをせまき
しばしをしましなど多かり

てゝにはひといふ哥を一つの体として擧られたるはいかゞぞや
れを一つの躰とせば哀傷、離別、其外をも擧べきにあらずや六躰を
いゑる中に此段のいはひ歌と云へるは頗の躰をゝりてさだめられ
たるなれどもたれりともれぼえずそもく　詩に六義あれば歌ゐも
必ず其躰なかるべからずそを思ひはかれたるはさることなれ
ども六躰の聊ことわりに協はぬことあるは遺憾きことずかし

今のよの中色よつき人の心花にありけるより

いまの世とは山城の京となりて天長、承和の比より延喜の比までを云へりさて古へのうたは言も心も實より出てあつくめでたかりしを今は人の心いろ氣にのみ

なゝれ花々しき事をのみ好みてうはきになりたるあり

でくれば　おだはいたづらなる義にてあだ波あだ名あだ矢などあり て皆實なきことに云へりはかなきは量りなきよりいでゝ定めなきことにも云ひまた取しまりなくをさく〻しからぬ義あり

ひとゝなれぬおとゝありて　今の世の人色を好みて哥とし云へば男女のなかだちごとゝなりてみだりるることのみ多くて眞實の哥の心はしる人なくなりたるなり埋れ木は地中ふうづもれたる木を云へるにて人しれぬ冠辭なり

まめ色好このいへに埋れ木のある所ゝはあすゝ紀穂に出をべきおとにをのらぞ

ありにたり　まめなる所とは眞實なるを云ひてやごとなく尊き御かたの御前を云へりさるかたき御方の御前などには出すべくもあらずとなり花すゝきは穂に出るの冠辭なりなりにさりはなりいにたりをはぶける古語の常なり

哥い心にふかくあはれと思ふことを言ればにつら絲てもたひ出るものなりそのあはれてふことは男女相思ふの眞心より切なるはあ

しかゝれば日本紀、古事記にも男女相思ふの哥多く萬葉集に至りていと多くこれを相聞の哥と云へり山城の京となりてはますゝ多久戀哥と唱へて君も臣も男も女も大方戀哥をとまぬものなく十に六七はそれなりある哥に戀せずば人は心のなからはしもろゝあるれはこれをりぞーるといへる歌また色このまぬ人は玉の杯のうてなきが如しなど云ひく戀歌の多かるはさる事ながら人の心めゝしくなりて丈夫のさけき道なを成しかばいともかしおきすめらぎの御いきほひもやゝれとろへ給ひてまつりごとを臣よりいづることゝなりにしは人の心のなまめきて眞こと少なくなりたるの態と云はざるべからず然るに此新世となりて萬の國の交際を親しく教のわざ學びの道も彌進み進み德教競ひ正しきを撰ぶの時よあたりてはいかゝ古き手ぶりなりとていかに眞心なりとも君親の前また子弟の上には憚る事もあらむはやくも貫之ぬしの思ひつかれてかくはいひおれかれたるならんを縣居翁の説に爰の文に云でとくては古へは男女相思ふことなきが如くきこえて皇朝の古への大道ゐそむけりこはたゞから文によりて書きものゞといはれたるはあまりかゝき云ひでとならずや

其いとしめを思へばこゝるべくあむあらぬ　上の歌のさまのみだりがはしくなりつるよし云へれバろをうけてそもく歌の世におこなはるゝ所由を思へばさるみだりあることゝ思はあらざりしとなりいま

しへのよゝのみかゝ春の花のあしゝ秋の月の夜おとにぞふらふ人々をめしておとにつけつゝ歌をたてまつらしめ給ふ　昔は御代々々の天皇春の花のさかりなるころ秋の月夜などゝは御わたり近くとのゐしはべる人々をめしよせ給ひて折にふれたる事につけ物につけて哥どもよみて奉らせ給ひしなりさむらふい守るにさとろへたる言ゝて君の仰せあらんことゝ伺ひ守れるとゝへり

或は花をおふとてさよりおき所にまどひ月を思ふとてゐるべおきやみにたとれる　花を思ひ出たひて遠き野山よあこがれ出てかへりぢふみさまよひなどしてよめるうた或は月のためよ思ひ起しで遠き名所をたづねなどゝてかへりて出る人もなきやみぢにまよへる折ゝにによめるうた詠りたどるは徘徊の暑言ゝで心もとなくさぐりて行を云へり

心々を見給ひてさがしおろかありとゝろしめしけん　月花をめづるゝとのは人々の心を見給ひて雅俗賢愚の差を知り食し給ひ去ゝなり

鈴屋翁の説に花をこふとてといふよりやみにたどれるといふまで
すべて風流たる人々のさまを云へるなり然るに諸説これを愚なる
かたにとれるはひがことなり賢愚共ゝろしめすはよめる歌のさま
をもてこゝろ考へ給へるなれもしこれらをれろかなるかたのしわざ
とせば今一ゝかしこき方をもいとではおとゝのはずといはれた
るはさるゝことなりまた縣居翁の説に唐にても詩に別才有ちふでと
く歌はよくよめゝ大政をとるかたにのなはぬ人こゝ多かれこは皇
朝の古へを思はで他の國の唐と云代ゝ詩もて及第せしをうつゝ書
たる也といとれしも一ゝたりさることなのら及第といふゝゝの事
ごそなけれ哥もて其人の賢愚を推ゝかり知し食すことなしとい云
ふべからず一首の歌にて位を進めさせ給ひし例なゝもまゝある事ゝかし

然いるのこゝろ（右のさがしおろかなるを知しめすのみわあらずとして思ひをやり心をなぐさむべき功能あ）るをあげられたり　そゞれ石にたとへ（こゝよりハ此集の哥をもて言葉としていひつゞけたり此歌は賀ニ「そが君は千代に八千代にさゞれいしの　いゝはとなりて苔のむすまで」）筑葉山にかけて君をねがひ（雑に「ちゝのしさをなにゝつゝ　る春のみやまれかげをこひつゝ」）よろおび身ニ過（雑に「わが上に露ろおくなる天の　まむからころもたもとゆ　さかにたてといたましを」）たのしこ心にあまり（雑に「ふしのね　川とわたるふねのかひの音か」）富士のけぶりふりによそへて人をこひ（戀に「ふしのね　のならぬ思ひにもえはもえかみだにけたぬわだにけふりを」）まつ虫の音ニ友をしのび（雑に「君しのぶ　草にやつるゝふるさとは松むしのねぞろなしかりける」）高砂すこのえの松をいのひおひの　やうにれば（雑に「たれをかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに」「われみても久しくなりぬすみのえ

のきしの姫松幾代へぬらん」「すみのえのきしのひめ松人ならば幾世かへしと問はましものを」などいへる哥によりて書る文なり相おひい鈴屋翁の説に相追也そは互に追み追はれみする意より出でぬくばくの前後もおく大方同じはそなるに云へりとありて我身の老を松にくらべてなげくなり）男山のむかしを思ひ出（雑に「今ころおきわれもむかしはをとこ山さかもく時も有てしものを」）をこゝなへしの一ときをくねるよを（秋に「秋の野になさ夕きたてるをみなへしあなすしかまし花もひとゝきくねるは源氏に心ざしにくねくしからずばといへる言みへたり今の世にもうらめしくややしき事なとある折獨りでするをくよくいふと云ふに同じき言なるべし）うたをいひてぞおぐさめける（こは萬の人君が御よはひの長からむことを思ひ君が御代の久しからむことをねがひ身のさちをよろこび人を戀ひ友をしたひ我身の老をうれへ男は壯年の昔しを思ひ出し女は若ざかりのはや過さりたるおとをくやしく思ふ折にも皆歌をよみて思ひをやり心をなぐさむべきなり

上には歌の全体をあげて其功能を廣くいひてこゝには我身の上にとりて思ひをやり心をなぐさむるもとゐ哥の功のひとつなるべきを

いへりこゝの文はいとよくいひつゞけられたり

また 上段につきて云へるなり此段には今は世久しく成りて云ひよせたる山川の上にすらかはれること多かれど古へのことは古き歌の殘れるをみて心をもなぐさむべしとなりさてこゝも此集の歌もていどり

春のひしたに花のちるをみ 春に「のこりなく散ぞめでぬき櫻花ありてよの中にてのうければ」

秋の夕暮に木の葉のおつるをきゝ 秋に「秋いきぬるみぢは宿に降しきぬ道ふ茅わけてとふ人もなき」おぞの哥多かり

あるゝ年毎にかゞみのこゝげにみゆる雪と浪とをおげき 雜に「鏡山いざ立よりて見てゆかむ年へぬる身は老やしぬると」冬に「行年のをしくもあるかます鏡みるかげさへにくれぬと思へば」

草の露水のあわをみてわが身をおどろき 哀傷に「露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草にわかぬ計りを」戀に「水のあわのきえて浮身といひながらながれてもなほたのめるゝかな」

或はきのふいそかえおおりて時をうしあひ世にわびぬさしかりしをうとくあり 雜に「あくらかにとふ人あらばすまの浦にやしほたれつゝわぶとこたへよ」わびは心も心あらず打なげかるゝをねひく俗に難義とも迷惑ともいふにあたれり

あるは松山の浪をかけ 東歌に「君をれきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなん」

野中の水をくこれ 雜に「古への野中のしみづぬるけれどもその心をしる人ぞくむ」

秋萩の下葉をあがめ 秋に「秋萩の下葉色つく今よりや獨ある人のいねがてにする」

あこがれの鳴のはねがきをこぞへ 戀に「あかづきのしぎの羽ねがきもゝはがき君がこぬ夜はわれぞかずかく」

あるはくれ竹のうきふしを人まいひ 雜に「世にふればことのはしげくれたけのうきふしどとに鶯のなく」

よしの川をひきて世の中をうらみわたつる 戀に「ながれては妹背の山の中におちつるよしの、川れよしや世の中」

今はふじの山をけふりと

こゝぞあり　上に富士の烟ゐよろべて人をゐひといひたるにむこのへたり　あぜらの橋をつくるあり　難に「よの中ゑ古ぬるものは津の國のながらのはしと我身なりけり」また「難波なるながらの橋もはくるなり今は我身を何ゐたとへん」などゐる歌により書たるものゐりつくるとは絶果たる歌いへり　ときく人は歌にのみぞ心をあぐさめける　しか聞へたる人々はたゞ其古き歌を唱へて心となぐさめけるゝなり

或説ゐ富士の山も烟たえずとよみて長柄のゑしも造るなりといへるよゑゐみたる説のふるくきてえゝ鈴屋翁は烟はたゝずして橋ゐ新に造りたるよしにとかれたるゐ片足立になりて猶あゑゝいでや其由を辨へんにむ上に今むとありて下ゑ歌のみゑとゐる言のかゝりと考へて、も ゑるきを昔ゑは富士の烟の立たること勿論なるに貞觀の比より後に其烟のたちたること物にみえず今の現ゐも烟のたつことなければたえずといふべきことにあらずまた長柄の橋は孝德天皇の長柄豐崎宮に天下を知し食し給ひし時に架せられて東は本莊より西は垂水ゐいたりて凡壹里許の橋にて世に類なき長橋なり然るに其後やゑ朽ゑりしを嵯峨天皇の弘仁三年再興ありゑとと

紀畧ゐ見へたり其後はかつ〳〵朽果て再興ありしとをきかず文德實錄に仁壽三年長柄年比はしけたさえて人馬通はず堀江川にならひて二つの舟ゑれきてゑたさんと願ひたりゑと許し給へり拾遺集ゐ天暦の御屏風ゐ長柄の橋柱纔ゑ殘れるかた有けるとて「芦間よりゑゐるながらのはし柱昔のあとのしるべなりけり」とみえ冷泉院の御時能因法師長柄橋の鉋屑一節と錦小袋に入て秘藏したることあり榮花物語ゐ是ゑがらとなん申といふふるき橋の柱さゝひとつ殘れりなどありて古く尽はてたりしてとしるければこゝゐいかで造るとはいふべきふしのけぬりもたゝずといふに對へては必ず絶はてたるをいいてはかなはざるなり

いましへよりのくつたはるうちにをゐらの御時よりぞひろまりにける　是よりは古へ今の歌をくよむ人の事をあげんとてゑかいへりきて此哥ちふものは古きむかしとりろぐ傳はり來つるも奈良の御時代よりことにひろくさかえきつるとなり　かのおほんよや歌のところをゑろしめしたりけん　おほんよは大御代を音便にいへるにて奈良の御時をいへり

奈良は元明天皇にはじまりて元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁の七帝をいふ此以前は皇宮も其御代々々に遷都ありつるに奈良の御時は七御代まで同じ都に住せ給ひて其名高かりしより去か云るならむ其實は其前なる天武、持統、文武の御代ゆ哥道もさかりに行はれて柿本人麿もゐられしなればこゝに言は事實にたがへるよしゐへる説もあれどこは大らかにいへるなれば一代、二代のことは此ゆちにおもれりと見てあるべきなり

かのおほん時におほきみつのくらゐあきのをとの人まろあん歌のひじりありける　人麿は齋明天皇の御代に生れて文武天皇の御時石見の國にて身まかられしことなるに其官は卑く其齢は五十にみたざりしとぞ然るをこゝに正三位とあるはたがへりとて或人は後人のさし入たるなりといへれど何れの本にもしかあればおれを貫之の筆にあらずとも定めがたしさてこゝにひじりとかゝれたるは漢文によられたり皇國ふては天つ日繼知しめす天皇を申奉ることなるをから國にてとよなく勝れたる人を聖人といへるによりてしかいゐれたるは名義の上よりいへばみだりなるが如くなれども哥のひじりといはれたるなればたゞ其歌の妙なることをいはれたるにこそあれ　まれゝ君を人を身をのはせさりといふなるべし　こゝ上にも下にも歌の道の行はきつるをいへるにて漢文に君臣合躰といへるをとられたるならん

秋のもふべ立田川まゐがるゝをこゝぢをばこゝどの御目に錦と見給ひ　秋によゝ人じらずとして「ゐつた川紅葉みだれてながるめりわゐらばにじき中やたえなむ」とあるはならの帝の御歌ありといへり此他にも帝の御歌もあるべきに御名をあげぬ例と定められたるばくちをしうなん

春のあした吉野山の櫻ゝ人まろが心にはゆ雲ゐとのみゐんおほえける　人まろの櫻のうた萬葉集にもみえねども貫之ゝ聞傳へられしにもあらんか

此處には事實にたがへる事も多くまた文詞もたゞかならぬこゝちすされば荷田大人も縣居翁も後人のわざなりとていたくはぶかきたれどもうべなひがたければ本のまゝにていさゝかわきまへつ

又山のべのあの人といふ人有けり歌にあやしくたへありけり赤人は奈良の朝聖武天皇の御代の人にて歌の道にとりてはしらずやしきまで勝れたりけなん人麿は赤人がうへにたゝむおとかたく赤人は人まろが下よさゝむおとこのたくおむ有ける

こは人まろ、赤人の優劣わかち難きをねべり漢文よ難兄難弟

とある語によりて書れたるおらん

縣居翁の説お人麿は長哥と專らとす其勢ひい天がける龍のごとく言葉は海潮のわくに似たり短哥の言葉はのつらぎの襲津彦眞弓をひきならさむがごとしをさなく悲き心をよめるよ至りてはきく人身もふるはるゝ計りおぼゆ赤人はみじか哥ゞ專らなる言葉なよらうに心高きこと富士の峯のよろりなくたてるよ似たり長哥い言葉きよらにおくたえてつゞける事水無瀬川の下ゆく水有かごとくして哥ろすゞた人万呂とと大きに異ゐりなくいとよゞ二人の哥を評せられたるなればこゝにじるしぬ

此人ゞをおきて又すぐれたる人をくれ竹のよゝにたえずぞ有ける人まろ、赤人れ外にも勝れたる人萬葉集よ多くみゆればおかいひてさて世々ゐたえずと云より今の京の弘仁などの年比までを思ひていへるおるべし其頃哥に名ある人はたゝえねども此集中よみ人不知といふ哥には必ず其頃の人々とおられてよき哥多かり呉竹はよの冠辞なり片糸はよるちゐ辞ゐいひかけたる冠辞おり

おれよりそれの歌をあつめてあむ萬葉集とあづけられたりける

是よりさきとは人麿、赤人の時より前つかゐを大らかにいへるなりこは左大臣橘ノ諸兄公の撰ばれたるにて天平寶字よりあなたの歌ゞ撰られたるなり

こゝなる是よりさきの云々下なるかの御時より云々などの件を縣居翁は荷田大人の説によりて後の人眞字序の誤りを誤りとも心づかずしてくはへたるものなりとおりてくさ〻論らひとぶかれたる説もあれどもとのはゝにく通えざることもなければ普通の本文

に從ひぬよしや事實にたがへることのありともれのれが心にさて
そおもちまはしきと異本にもよらずして本文をはぶきもしくはへもす
るはこのまましか
ちぬわざかし

おゝにんにしへのおとをを歌の心をを志れる人僅に
ひとりふたりありき　是よりは弘仁、天長、比より仁和、寛平の比まで
るなり古へれことゝはふるき世々の萬のこと哥の心をも哥をよみ出べ
き心れきてをいへりひとりふたりとは畧きいへる常の言にて下なる六
人にわたれり

しこのゝれどおれかれえたる所えぬとおろさがひ
よあむある　下なる六人は近き世に勝れたる人々にてさすがによく
もよみ得たりとおぼゆることもあれどはたしからぬも
あれば即下にそをことわれるあり

このの御時よりこのゝた年ゝをゝとぜあ
まり御代ゝとつきにあむありにける　こは平城天皇大同のはじめより今上天皇

延喜の今まで御代は十代
百年餘りになれるをいふ

てゝは古今集を撰ばるゝ時代をあげて彼萬葉集には人麿、赤人なを
いへるてよなき名人もありつれども其後は絶てさる名人もなく僅
に一人、二人ありつるも得失ありて彼二人
よたくちぶべき人なきをなげきたるあり

今おのおとをいふにつこのさくらゐたこのき人をゞゝやゝ
をきやうあればいはぞ　上にいへるごとくおれかれえたる所えぬとゝろをいはんゐ官位たかき御方の
歌を何をれと容易く論はん
事憚あればゝはずとなり

この詞にて此集には天皇、皇后、太子の大御歌をなみ〳〵の人とは
じへむことを恐れてのせられざりしことをもおかしたるあり

その外ゐちこのき代に其名きゝえたる人は　ろの外ゐとは右の官位高き
人たちの外ゐ
といふなり

すゐはち僧正遍昭は歌のさまはえたれど

をまおとすくおしたとへば繪よめける女をこてれた
づらに心を動かすがおとし　遍昭のうさのすおたさやくしどして滯なきをいふべし實少しと
は心にもあらぬことをまことしやかに心深げよいへるゐり繪にかける
女はいかにうるとき久ともものもいとねばろれにむかひていわとらん
とするもいたづらごとなるよしにたとへて此人の忠實なる心に似つか
いしからず歌ゐはなゐめかしくたいふれたることをもよまれしてと
いへるならん

遍昭はもと良峯宗貞といひし時藏人頭にて仁明天皇に仕へ奉りし
が天皇崩御の時剃髮して佛の道に入て世の塵をさけ妻子をすて
世に執着れ心いいさゝらもまかりー人也然れども女に贈られたる
歌も多かれど皆かりのたとふれによまれたるなりある時清水にく
小野小町が「ぬとの上に旅ねをすれどいとさびしてけの衣をそれゐ
かさあむ」といひやりたるかへしに「世をろむくきけの衣ぬたどひと
へかさねたらとしいさふたり紡ん」といひやりてあとをかくされさ
た初顏にてもとの妻ゐあひてものをもいはで打過られたるゐとは

人情にそむくべきとくなれど已に出家されたる上は堅固れ大德と
やいたんまた此集中に「淺みどり糸よりかけて白露を玉にもぬゐる
春れ柳か」「たちす葉のにでりゐ去まぬ心もてなにかは露を玉とあ
ざむく」また嵯峨野にて馬よりおちてよめる「名にめでゝおれるばか
りそをみなへしわれおちにきと人にかたるな」是等のうたをもて思ひ合すべし

ありはらのなりひらいその心あまりておとづさらず
こゝにもたとへいのことばおちたるにや　おほめる花の色なくてよはひのおれ
るがおとし　此朝臣のうたは其こゝろ十分にあまりありて其言たら
ずとは其願りの言だりとゝれはぬところあるなりそを
たとへていはゞ花のしぼ系たるも其香は遠く匂へりとなむ

業平朝臣は阿保親王第五の御子にて行平卿の弟なり貞觀年中左近
衛中將に任せらる世ゐ在五中將と稱するは在原氏にて第五子の中
將なればなり此朝臣のうたゐ「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわ
がみひとつはもとの身にして」「大かたは月をもめでしてれゐこの

つもれば人のれいとなるもの」「紅ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはうなにもなりまさるかな」「千早振神代もきかず龍田川からくれなゐに水くゝるとは」などの歌を思へば其すがたの閑麗なるがごとく歌もみやびにうるはしかるをよしや其香はあやへるもしめる花の見どころなきにたとへたるはくちをしうなん

ぬん屋のやすひではおとばいたくこゝにてそのをまみにおはぞれはゞあだ人のよきゝぬたらむがおとし

康秀のうたろの詞はいとよくたくみなるもろこゝ弊のおとりて其詞に相應はぬい商ひする市人の美はしき衣服をきたらむがごとしとたとへたるなり

康秀は其祖先詳ならず元慶元年縫殿助に任ぜられたり其哥多く傳はらずといへども然るべき歌人にてゝにあげらきたり康秀のうたに「吹からに野べの草木のしをるれば山風をあらしといふらん」深草の帝の御國忌に「草深ゝかすみの谷に影かくしてる日のくれしけふにやはあらぬ」此うたなどは其心かなしく其躰をゝしくれば也るなる縣居翁の説に草深きちふ歌のつよくかたくして悲しきは古人の丈夫の哥をわすれざる也此姿をわ弱しとせば人麿の「大君い神にしませば天雲の雷の上にいほりせずかも」「赤根さす日はてらせれどうば玉れ夜わたる月のうくらくをしもなど同さまのたくみありてゝたくりよれ所をもえぬとゝろとせばさきに今のよの中人の心花と成しをなげきつるとこゝの判の異に聞もるはいかにとあり抑詠歌の容易からぬわざなることい古への風によらんとすればすがたかたくなり姿うるはしからんとすれば丈夫の心を失ふべし貫之も姿のうるはしき方によられしにや其歌めゝしくして丈夫の姿なるはみえずなん

宇治山の僧喜撰はことばかずおよしてはゞめをはりたしかあらぞれはゞ秋の月をこるにのこづきの雲にあへるがおとし

言葉かすかなりとはえたる所おれば幽玄にして奥ふかき所ある筋いへり始めをはりたしかなら

ずとは言のいひつくさぬところあるをえぬ所とす其は秋の夜のふけ行月れいとあはれあるさまをかすかにといひ其月乃あかつきがたに雲のかゝりてみえかくれするにをばりのたゝかおらぬをたとへたり

此法師ハ其系譜見るところなし弘仁比の人なりといふ其歌は「我庵ハ都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり」此哥より外にきこえすたゞ此一首にてかゝる判をせらるべしともれぼえねば貫之は其哥の數ありしをゝられたりしにや

そのゝ小町はいましへの衣通姫の流なりあれども

やうにてつよからずいはゞよき女のあやめるところ

あるに似たりつよからぬはをこなの歌なれば

なし

小町のうたは昔の衣通姫の流義なる歌なりあれなるやうにいふたる所まて其心ふかくていとなつかしくゆかしきさまなるをいふつよからぬはえぬ所にてかたくをゝしからぬをいへり其歌のさまはうるはしき婦人の眉を顰めて惱み苦しむところあるにたとへたりつよからぬ云々ハ丈夫の歌にくらべていかたからぬ所もあれど女なればさるところもありなんとおもはるはあまり艶にてかよはきかたなれると云るにや

小町は仁明天皇の時の人にて其家系詳ならずされども美人のきこえ高く哥に堪能なりしてとゝ世人のしる所なり衣通姫は允恭天皇の御后にて後の世に玉津島明神といはひ奉るこれなり此御后のうたは「そがせてが來べきよひなりさゝかにのくものふるまひかねて」といへる此外に二首あるより外おしるべきよしなけれど世に歌神とあがめ此文に云かゝるは定めて歌にひいで給ひしことしるく延喜の比までは其御歌の傳はりしにやあらんさて小町のうたは「思ふつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらまし」「色みえでうつろふものはよの中の人の心の花にぞありける」「わびぬれば身をうきぐさの根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」其外集中にも多しゝ

大友の黒主は

こゝに「心さかくて」とか言はおもしろくてとかえたる所なくてもかなはすこは脫たることゝぞなし

そのさまいやしいはゞたきゞおへる山人の花のかげ

にやすめるがおとし　ねやしは殿下の義にて身く劣りたるをいふ薪を負る柴人らが咲句へる花の木かげにやすらへるさまはいと面白けれど下賤のものなるにたとへたり

黒主は大伴旅人卿の子孫にて小野小町に思ひかけしてとあれば仁明天皇の御代比ろ人なるべき黒主の哥に「思ひ出て戀しき時は初雁のなきてわたると人しるらめや」「鏡山いざ立よりてみてもかんとしへぬる身は老やしぬると」「春雨のふるとゝ濡か櫻花ちるををしまぬ人しなければ」などあり此黒主のうた今多く傳はらざれば其哥のさはとたしかゝ見とむることをえざれど此六人の中におげられたるおれば尋常の哥人ならぬてあきらけし縣居翁の說に此人の哥のさまといやしといふはいかにぞやかろしなどはいひもせんかの遍昭は歌の姿を得たりと云にむかふるに詞のきよらにさとやかれらぬをばいやしと思ふゆや萬葉にていはゞ人麿のいげしく大きるも黒人の原くさまやかなるも赤人の清く高きも憶良の古くかたきも其外人ごとに異なれどれの〳〵四の時の趣あるが如し貫之のこのみはたゞ春のうら〳〵かなるをとりて外の時哥も皆春なれと歎へひに似たり夏の日のかしてゞ秋の空の悲さく冬の風の烈しきも

かの〳〵よ去ありて天地の行ふわざるれば天の下の人の上をいふ時は去かりかたとるべからずされば歌もものどろにもいかめしくもあれにもかたくも人々の生れ得たるさふ〳〵いおて各よろしき事上ゝ擧たる人々のごとし爰の判は一人の好ゝにかゝむき大やけならずてろあれといもれたり

此外の人々其名聞もる野べよおふるこのつらのはひひろおり林にさげき木の葉のおとくゝ多これど歌との

こ思ひて其をましらぬあるべし　歌よむ人の世にひろゝ多かるをはひひろでれる葛かづらと木の葉のさげきふたとへたりされど自らは哥と思ひとらむも歌のさはゆ得ざれば其よしあしを斷るべきはゞあるはなしとなり

此ことばいあまりくよしすぎたるいひざまなり此中には行平、篁、伊勢、敏行なゞ其外にもよくよむ人ありかの六人には不及ともさのみおとらぬ人等とおもはゆれば

かゝるに今すべらぎの天の下知しめすこと　すべらきは總知去食す

君の義にて醍醐天皇をいへり　よつの時こゝのかへりになむ成ぬ　四時れ一年を

いふ九返は九年なり此天皇寛平九年に天位知ろしめして今延喜五年は九年に當ればなり　あまねきおほむう

つくしみの浪八島（洲）の外までながれ　普（アマネ）きはすべてもれなくと云るなりうつくしみ

のめみを漢語に恩波によりたるにて民を廣く憐みます大御恩德の遠く及ぶを波にたとへて此大島の外の國までもうるほひしをいふ　廣

きおほむめぐみのかげつくばの山のふもとよりもしげ

くおはしまして　筑波山は山しげ山などいひて木立の繁れ山なるをもて大御惠みの繁きにたとふ　萬の

政を聞しめすいとまもろくのことを捨（スア）給はぬあま

りに古への事をもわすれじふりにしことをもおこ

給ふとて　天の下萬機の政聞しめすには大御事多端（シゲ）くおはしますにも其大御暇には百般の事に大御心をつけさせ給ふあまり

に古き代のことをも忘れ給はじとて萬葉集の後に此事のたえたるを再びおこし給ふとてなり　今を見そなはし

後の世にもつたはれとて　此度えらばせ給ふ歌集には今の世の人の上をも大御心に殘るくまなく見

あかし給ひて後の代にもつたはれかしと思ほしめしてなり　延喜五年四月十八日に大内記

紀のとものり御書ところのあづかり紀のつらゆき前

のかひのさう官おふしかふちのみつね右衛門府生

みぶのたゞみねらにおほせられて　大内記は禁中にありて大小の勅宣などの草案

をかき又御記錄などをつかさどれり御書所のあづかりは秘密の事などを書記す所ありてその事を預（アヅカ）り知をいふさきのかひのさうくわんは

前の甲斐國の少目（サクワン）たりしなり右衛門府生はさう官の下に四人あり此人たちの中に友則のみ五位にて其外は卑き人たちなれど時に歌よくよみ

たゞしかゝる仰ごとの下りしなり　まんえうにいらぬふるたうたこゞからのをもたてまつらしめ給ふとあむ（ひて）　萬葉集にいらぬ古き哥とは奈良の朝の歌の萬葉にもれたるを始めとして今の京の哥人のもえらびとり自らのをもとは此集を撰らべる四人の歌をも入べしとあり

醍醐天皇の御政に大御心をとゞめさせ給ひしより世の治つゞしをいへば延喜の聖代と稱へ奉り玄なりされば此みかどのありき大御心に歌の道のやうゝにれと佐へれつることをもなげかせ給ひて此集を撰ばしめ給ひ彼萬葉につぎて哥のことをれてさせ給ひしいとたふとくなん

それゞ中ゝを梅をこゞずすよりはゞめて時鳥をきゝ紅葉をゝりて雪をこるゝまれたるまで　これの中にも云々は此集の部のついでをいふ

梅は春、時鳥は夏、紅葉は秋、雪は冬と四季をまづあげたるなり　又つるゝめにつけて君を思ひ人をもいはひ　また鶴亀などによせて君の御壽命を長かれと思ふたふとみ其外の人をも祝へるは賀の部なり　秋萩夏くゝををみてつまをよひあふ坂山にいたりて手向をいのり　秋の萩れ花夏の草などを見て妻を戀しく思ひ逢坂山越で旅立て手向の神を祈るとなりては離別の部戀の部を取すべて大らうにいへるなり　あるいは春夏秋冬にもいらぬくさ〳〵の歌をおむえらびせ給ひけるかくさだめてえらびてよと仰つゞられしまゝに撰て集めたりとなん　或いは四季戀の部ともいらぬくさ〳〵は雜部とじて大歌所のをもかねたり

づけて古今和歌集といふ　此集に千百餘りの歌あれど取すべて千字たとはいへるなりはた卷は春より大歌所れ御哥まで二十卷なゝ古今は上にもいへるごとく萬葉集よりいらぬ奈良の朝より今ゝ京の大同、弘仁ゝ頃までを古へとし仁壽齋衡などの比より昌泰延喜の比までをいへるなり

此處は歌の部類の順序をあげて四季、賀、離別、戀、雜とわかてり其後は賀と離別は雜の部に入たり

かく此たひらつめえらばれて　是よりはかくあつめ撰ばれたる歌の數も多くおりさるを末永くつたはらむずるいはひごとをいへり　山下みづのたえずはまのまさごの數多くつもりぬれど　山下水は長く絶せぬことにたとへ濱の眞砂とつもりたる歌の數多きにたとへたり　今はあすか川のせにおるうらみを聞えぞ　〃　れ石のいはほとなるよろずよびのこそ有べき　今かく歌の集のおりたる上は淵瀬さだめぬ飛鳥川の瀬となるごとく歌の風のわるく變る遺憾もなく哥の道のいや深くならんことしるく此もく末の御代々々にも此事をなし給ひて榮えもきゐば今この小磯石なるも後にといはゝとならんごとのよろこばしく思はるゝとなり　それまろらは此仰を蒙りたる四人の我々といふ義なり其まろらは眞名序に臣等と書たるに同じまろとは才なく愚かなる心にて古へおのれを謙りていふ詞なり然るを後にまくらと訓るは誤りなりまた鈴屋翁のまろといふは無禮き語に用ゐたる例なれば此序なをにいふべきにあらずと云れしはこゝろえず　言葉は春の花のにはひすくなくしてむなしき名のみ秋の夜のながきをあかしてれば　ながと葉れうるはまかちぬを春の花の匂ひ少きにたとへむなしき名ゐ長く殘れるまとを秋の夜にいひかけたりかてれば懸着留ちふ詞にて此えらみを承るによせかこつけて哥にたけたる名を得たれを實いまだしければ空しき名なりと下りていへり　かつは人のこゝろをたそりかつは歌のまゝろにはぢ思へば　かつは其上おといふ義にてこれをいひてかれをもかぬる詞なりおろしのつゝまりなり然きば世の人のきく所もいかゞあらんとおろれ歌の事につきて我心にも耻らるゝとなり　たゞびく雲のたちるまく鹿のおきふしいつらもきらが此世におゝどくうまれてこのおとの時よりおむあへる

をよろおびぬる　柵引くもは立居といはむため鳴鹿はれきふしといいむためなりさて右のごとくおそり耻ること

ありといへども貫之い世の人とともにうまれながらおきく此事ゐあづかれるをよろこびぬるとなり

此段は此集のなりて世々に哥の道れさかえゆかん事を思ひまた勅によりく自らの哥をも擧たることを耻恐れつゝもうれしみよろこべれたるなり

人まろはをでにおくありされどを歌のおとゝまれるあゐ　人まろは既におくなりたれども哥の道は世よとゞまりてたえずなんあることとは此集をもてゐかじとすべしとなり

右に下りてこゝにあがりたることをいへるは漢文の法によりたる言にてあしどにもあらねど論語に文王既に沒したれども文こゝにあらずやと孔子がいへりしことをとりてかきたることとしるくて意ゆかずなん

さとびときうつりおとさりたのしびかゐおびもれこゐ

ぶとも　是よりは此集のすゑながくゆさはらんいはひごとをねふさて此たどひ世の中のうつりかはりていかにありゆくともいへるなりたのしびはたのしみゐ同じひとみむかよはしていへること多し

おのうたのをしあるをや

何をやぎの糸たえず松の葉のちりうせずしてまそれのあづら長くつたはり鳥のあと久しくとゞまれらば

鈴屋翁の説にあるをやの四字は次のあをやぎよりさぎれたる誤なるべしもしこ若にて久しくとゞまれらばといふよかゝれる詞也とあるはさることとなりまた下ゐ鳥の跡とあるは文字をいへるなれども文字あるをやといふべきゝあらざることと明けしさて青柳の糸松れ葉まさきのかづら鳥のあとみな冠辞をもて言葉のあやをなしたるなりとゞまれらをゝとゞまりあちばの義なるべし

大ぞらの月をこるゆおとくゝ古へをあふぎて今をおひざらめゐを

此集のなりたるをみて後の世の人々は大空の月をみるがごとくに此延喜の御代を思ひしたはぬものはあるまじなり

此段に冠辭をおらべていへる言どもは上にも似たるさまのこと多ければおかぬて、ちす今の世にもて、の文によりて文章、祝詞などに多く冠辭をれけるなどは聞ぐるしくまた實情を失ふこともあれば必すべき事ぞかしさて二百年をかりてこのかた古へ學びのひらけし上よりは吉胤らのをぢなきも其よしあしをことわりさだめまた漢文によれるなどなにくをとあげつらへるもそのかみを思へば學びといへば漢學のみおりしときにあたりて皇國ことばの假名文をかくことはひとり貫之ぬしにいとまりて世にあま絲くおこなることゝ成たるはこよなき功績にぞあるあなたふとしや

古今集序解 終

大堰川行幸和歌序解

大堰川と桂川の上流をいへり此行幸は昌泰三年の九月なるべし醍醐天皇なるべし或人は宇多上皇なるよしにいへど上皇おれば御幸とあるべ大[illegible]きなり

あはれ我君の御代長月の九日をきのふとれひて

あはれなる嘆息の詞なり秋のあはれのおかはる折の行幸おればみるものにつけてあはれならぬものなければ去がいひおこされたるなり我君の云々は此度の行幸をも九月にいひかけられたるいとめでたしきのかとびひてとは十日をいへるなり

殘れる菊見給はん又くれぬべき秋ををしみ給はんとて

菊は九月九日の重陽に菊花宴おこなひて上にも下にも愛翫ぶもれなれば已に殘れる菊といひおたくれ行秋のけしきをも御覽せさせ給とんとて思ひおもはせ給ひしを

月の桂のおもかげの春の梅津より御船よそひて渡し

守をめして　桂の里のことなる梅津より御舟を出し給はんとて御帳しきものなど美しくまけろなへてろこなる渡し守に仰せつけられしなり

夕月夜小倉の山のほとり行水の大堰川邊に

こゑもきさし給へば　小倉山の近きわたりを通りすぎてはや大井川のほとりよりはでは過したればなり夕月夜行く水の冠辭にていとおもしろくかゞれり

久かたの空よりたなびけるゆ雲をもおく御

ゑもきを待流るゝ水は底に濁れる塵おくて大御心よそ

あおへるとみまとのりして　大空には一点の雲だになく晴わたりてけふの御ゑもきを待たるさまに愚はれ水底にはいさゝかの濁りもなく澄さたりて大君は叡慮よ適へるをいへり

仰給ふとは秋の水

にうあびていおがるゝ木葉とあやまゝされ秋のやまを

これがおりびまゝおれ錦とおもはえ　是より群臣等にも仰給ひ大御自らも詠じさせ給ひし御歌につきてつらねいへるなり空秋の水に云々は舟をうかべるを遥かに見れば木葉は浮たるにまがはれ秋の山ゐは紅葉の千しゐの色よずき間もおく織うけたる錦のやゝに思はるゝなり

紅葉のはの山風よ散てをらぬ雨

とれおえ菊の花の岸に殘れるを空なる星と驚き　紅葉の風にゆゝされてちりかゝるゝ雨のごとくなれどもいかに荒たるとまやにもちらぬゝ紅葉なりけるよとなりまた菊の花の殘りて咲匂へるは星の如くにみえたるなり

霜の鶴川邊に立て雲のおるかと疑はれ夕の猿

山の峽よ啼て人の涙をおとし　鶴の川邊ゐれり立たるは白雲の下り居るかとうたがゝるゝなり鶴に霜をいひかけたる萬葉集に例多かるより去かいとれ去ならん夕ぐれの山のはよ啼つる猿の聲ゝいとかなしくて涙をもおぼらしむるとかりこは漢土の故事によれり

旅の雁雲路にまゞひて玉づゝとこえ遊

ぶ鷗水にをみて人にゐれゝる　歸雁の雲路にかけり行さまは玉づさの文字をつらねたるゝ

如しとなりこは蘇武が夷の國にとらはれとなりし時雁の足に王章をもひ付て遣はさりし故事によれり鷗は水に浮びて常にあづかなるものなればろれに伴おて世のわづらはあき事を忘るゝなど多く詩人等のいふ事なり

入江の松幾代へぬらむ

といふおとをよませ給ふ

昔よみ對句ともて言葉のあやをゐしたるはぬとめでたし此文も始めとり對句ともてかゝれしはいとおもしろかるにてゝにたゞ入江の松とある に對へることのなきはもし渚の竹はのとらぬ色ゑあらいしおゞ云へり

ことゝの脫たるにやあらんさて是までは此たびの歌によりてかゝれゐるおりとはせはたふとび詞にも云べれゞ古今集の前詞には多くよゝさしめ給へる意にかけり

我等みトかき心のこのをかのをにまゞひつたおき言のは吹風の空にみだれつゝ

こは帝ゐ對ひく下り云はれたるゐりみとかきは才智のすぐれぬを云ひてつたなきと同じまゞひみだるゝは言葉れたしかならぬさまを云へるおり

草の葉の露と共に泪おち岩波と共よよろおはしき心ゞ立ゐへる

かゝる大御代にあひて數ならぬ草葉にひとしきわなゝらゐも大御惠みの露深き仰せをかゞふりて有ゐたき泪にむせび岩波ゐ緣ある立かへりく してよろこびの心のつきることなく

此言の葉世の末まで殘り今をむかしにくらべて後のけふをきゝむ人海士のたく繩くりこゝへし忍の草のおのゞざらめや

このたびの行幸ゐつきての言のはの長く世につたゝり殘りて今此御代を昔しの御代に思ひくらべて後の世の人も夢ふのおりさまをきゝん人は必ずくりかへしてもてひしのばんものゞとなり海士のたく繩は手ぐりゐる繩にてくりうへしにかゝり忍の草もーのぶにかゝれる冠辭なり

此序文の言の葉のあやあるのみならず其行幸のさま思ひやられくれ行秋のあはれふかく今は千年あゞりも來經にたれゞ其御代のおとのいとなりかしゝ思ひやらるゝものから同じ心にしのばん人はた後の世にも多からんかし

大堰川行幸和歌序解終

○古今集序解　一卷　開板　賣價金拾四錢　遞送料貳錢

附大堰川行幸和歌序解

國文い紀貫之を鼻祖とすべし其著わされたるものは土佐日記また此古今和歌集序大堰川行幸和歌序是なり日記は已に畧解を出され今又此二序の注解を乞得たれば貫之の名文全く伺ひ知る事を得べきなり

○葬祭要儀　一卷　近刻

此書は先日本人民たるものゝ外國の葬祭に據るは非なる所以を論し當今朝野に行はるゝ本邦の葬祭を經驗して其心得と懇切に辨明し祝詞は遷靈出棺墓前歸家祭を始め靈祭改祭招魂祭等迄るまで悉く作例を擧られたれば貴賤の葬式靈祭を行ふに必要の書なり

○徵古新論　二冊　近刻

此書は天地開闢の元因我大日本建國の來由と古典わ徵ね洋說に照して論定せられたる古今未發の論にして實わ我哲學の書たり

○建武年中行事管見　二卷　近刻

此は後醍醐天皇の叡慮わ出て北畠親房公の著されたる書なり禁中の公事作法を記されたれば猥褻の事なく學校必用の書なれば此度注解せられたるなり國文の模範として有職故實をしるべき良書なり

門人　工藤虎太郎記

◎乃樂舍大人著述書目

○古語拾遺略解　一卷　開板　賣價金廿八錢　遞送料貳錢

此書は先生皇典講述の餘德を以て注解せられたる簡便れ書よして初學の者も入安く又我國家の成立上古の神跡を知べき必用の書なり

○大祓遺義　一卷　開板　賣價金卅三錢　遞送料貳錢

大祓わ群臣百官に宣聞すべき宣命の如く誤認ゑて神に向て奏すべきものに非ずと思へるもの、多かるを遺憾に思はれて其誤を正し又大祓卽天津祝詞たる事を證明せられたる也此注解世わ多しと雖も此書を以て千古未發の卓說とすべし

○祝詞手引草　上下合本一卷　開板　賣價金卅二錢　遞送料四錢

此書は廣く祝詞の辭を類聚ゑて註解を下され又祝詞の作例をも多く擧られたれバいかなる祝詞も最易く起草し得べき手引の書なれば神官教職の座右ゑ放りべからざる書なり

○大日本四恩教の歌　小本一卷　開板　賣價金二錢　遞送料十冊以下二錢

此書は神恩皇恩國恩父母恩の四恩を七五の長歌わ詠せられたる書にして修身の必要なれば幼年の者わ讀しむれば自然に不孝不忠れ人なかるべきなり

○土佐日記略解　一卷　開板　賣價金拾八錢　遞送料貳錢

此書の註釋多ゑと雖も或と密に過ぎ疎に失して其要領を知得難ぎより或人の乞によりて註解せられたる書なれば誰も見易く知り安く和歌和文に志あらむ人は先つ此の書によるべきなり

明治廿六年三月一日印刷
明治廿六年三月二日出版

賣價拾四錢

著作兼發行者　佐賀縣士族　岡吉胤
三重縣安濃郡新町大字古河百六拾壹番地寄留

印刷人　三重縣平民　田中房吉
三重縣安濃郡新町大字八町百三拾九番邸ノ貳

40
127